

## 羽094R

# 「（擬）天台智者大師智顛別傳」初探\*

佐藤礼子

### 一、はじめに

杏雨書屋より2009年に發刊された『敦煌祕笈・影片册』一に見られる羽094は、二紙からなる卷子本である。その羽094Rの表題名は『敦煌祕笈・目錄册』および『影片册』では「（擬）天台智者大師智顛別傳」であるが、李盛鐸の舊目錄および羽田亨『敦煌祕笈目錄』では「唐三藏哭西天行記一卷」となっている<sup>1</sup>。これは094Vに見える「唐三藏哭西天行記」の書名を採用したものと考えてよかろう。また、094Rの内容について、『目錄册』には、「首部ハ、天台智者大師別傳異本。中途ハ經論ノ釋文。尾部ハ、佛曲？」と記し、第一紙半ばまでを天台智者大師別傳の一種と比定している。確かに第一紙前半は智顛の別傳と云う内容であり、しかも現存する諸別傳には見られない記述を持つものであって、智顛傳の成立や傳播を考える際、考慮すべき新たな資料となりうる。ただ、これは異本ではない。筆者は、「中途ハ經論ノ釋文」と記される「釋文」の一部であると、それも天台大師智顛の『維摩經玄疏』関連の「釋文」であると推定している。管見の限り、これまで同寫本の釋文を提示し、また内容を検討した先行研究は存在しない。ゆえに以下に卑見を述べ、本寫本に對する初歩的な考察と、智顛傳の一種としての本寫本のもつ價值についての考察を試みたいと思う。

---

\*本稿は2012年6月4日、中國中世寫本研究班での發表にもとづき加筆修正したものである。當日は班長はじめ劉安志教授や班員諸氏から貴重なご意見を頂戴したほか、俄藏會における羽094R輪讀の際の配布資料（藤井律之氏擔當）も参考させていただいた。また後日、天台宗典編纂所の荒槇純隆所長からも、本寫本について有益なご指導を賜った。ここに記し改めて深甚なる謝意を表すものである。

<sup>1</sup>岩本（2011）65頁に、『敦煌祕笈・目錄册』の排列次第は、羽田亨『敦煌祕笈目錄』によって書かれた落合（2004）、高田（2004）の指摘と一致するという。

## 二、維摩經の注疏

『維摩經』は『維摩詰所說經』、『維摩詰經』、『不可思議解脫經』、『淨名經』、『說無垢稱經』とも呼ばれ、各宗派の根本經典にこそならなかったが、在家菩薩のプロトタイプとして、魏晉南北朝を通じて王侯貴族に廣く受容され信仰された經典である。同經は方・許（1994）によれば、七回に渡り譯出されている。智顛の『維摩經玄疏』は、そのうち最も世に行われた鳩摩羅什譯『維摩詰所說經』（T14、No475）と、羅什門下の僧肇の手になる注釋書『注維摩詰經』（T38、No1775）に基づいて編まれたもので、歴代の史書によれば、智顛の最晩年に晉王楊廣に請われて著し、その死後になって晉王の手に届いたものであるという。例えば『國清百錄』卷三「遺書與晉王」には、「聖心重法、令著淨名疏。」といい、また晉王がその遺書に答えた「王答遺旨文」には、「先師天台智者内弟子灌頂普明至奉接。（開皇）十七年十一月二十一日、遺書七紙、手迹四十六字、并淨名義疏三十一卷。」といい、あるいは『天台九祖傳』の智顛傳には「晉王仍請大師、著淨名疏」などと記されている。

さて、敦煌においても『維摩經』とその注疏は廣く流通し書寫され保存された。そのことは數多の先行研究により明らかであり、ここで贅言を要するまでも無かる<sup>2</sup>。本稿では智顛の『維摩詰經玄疏』系統に屬する注釋書がどの程度殘存しているのか、記しておくこととしよう。

まず、智顛『維摩詰經玄疏』そのものは、『敦煌遺書總目索引新編』によればわずかにP4695『維摩詰經玄疏』の存在が知られるのみである。しかもこれは斷片一紙であり、敦煌において玄疏がどれほど讀まれていたのかを判断する材料たり得ないが、僧肇の『注維摩詰經』が多少なりとも存する（P2214、P4088、P2095、Jx01626など）のに比べ、その流通は多くなかったのではないかと推測される。

また、玄疏系統の注釋書には、『淨名經關中釋抄』が知られる。これは『淨名經關中釋批』、『關中疏釋批』などとも呼ばれるもので、唐の資聖寺の沙門であり不空の譯經事業の潤文を擔った道液の手になる。同書は智顛の玄疏に基づきつつ、諸家の維摩經注を吸収また批判もしており、その注釋は精要を極めている。『敦煌遺書總目索引新編』には20種あまり著録され、比較的利用され流通したらしいと知られる。道液はまた僧肇『注維摩詰經』に基づく『淨名經集解關中疏』も著しており、この名の似通う二書は明確に區別されなければならないが<sup>3</sup>、こちらも50點以上の所藏がすでに知られているから、道液による維摩經の注疏は、中唐以降よく行われたものらしい。

<sup>2</sup>詳しくは、曾（2009）を参照。

<sup>3</sup>方・許（1994）p.151に「本釋抄與同作者所撰淨名經集解關中疏不同、是以隋智顛所撰六卷本維摩經玄疏爲主、吸引了各家對維摩經注釋竝加批釋而撰成。」という。

この『浄名經關中釋抄』と『浄名經集解關中疏』とは、日本にも將來された。承和六年（839）9月2日付の上表を附す『常曉和尚請來目錄』（T55、No2163）には、

維摩經疏一部四卷（＝浄名經集解關中疏）

維摩經釋批一部三卷（＝浄名經關中釋抄）

の書名が見え、いずれも作者を道液法師と記している。さらに、常曉は維摩經を講ずる際に道液の注疏が廣く利用されたことを次のように述べる。

右維摩經、窮微盡化、妙絕之稱也。造疏之人、數般論旨、左右詞疎、理蹇于是。至開中液公、大宗蕪蔓眞極而開。今見大唐眞典近代興盛講文學義之類、總此疏等以爲指南。是故、每寺講浄名典、化度白衣、以液公疏提撕緇徒。皆云、雖有諸師註疏、慧底未足。乍學此文、法鏡轉明、慧燈益照者。

『浄名經關中釋抄』は、今大正藏第85卷に収録される<sup>4</sup>。

### 三、羽 094R の内容と構成

では、羽 094R は何れの注釋の釋文であるのか。その解明のためには、まず羽 094R そのものの内容を見ていかねばならない。

羽 094R は、目錄冊によれば用紙は鹿紙、一紙あたり縦 27.8 × 横 42.3cm、影片冊の寫眞を見る限り界線は無く、24 行、行 20 字内外不等、文字は楷行を併用している。本文一行目冒頭に破損が見られる他は、文字も鮮明で比較的判別しやすい。全 43 行、末尾 3 行は目錄には「佛曲」とあるが、偈頌か。

以下羽 094R の錄文を掲げる。なお、□は一文字分の判讀不能箇所、□で囲んだ文字は検討の餘地の残るもの、〈 〉は挿入を表す。本寫本では、菩薩、菩提は「井」「菟」のように合字を用いるが、以下の錄文ではそれぞれ菩薩、菩提とした。本錄文は現段階では完璧を期したものといえないが、今後、修正を加え、より十全なものとしたい。脱誤等ご指摘いただければ幸いである。

- 01 □知法勝。先辨其人未審。天台是何人也。言天台
- 02 者□山立稱。天台法師住在此山。莫敢取其名。故
- 03 就山名其號也。法名智顛。俗姓陳氏。是荊州南<sup>□</sup>園
- 04 郡華容人也。乃是地。前業生菩薩。造維摩
- 05 經疏千紙。門前先立此五義。何以知是地前業生

<sup>4</sup>詳しくは方・許（1994）を参照。

06 菩薩。年始七歲。因隨父母入寺。至法花道場。聞一僧誦  
07 法花經六卷。隨聞隨誦。意猶未足。餘一卷不聞  
08 諦自思惟而便悟也。及〈年〉十五。聲遍天下。教典竝通。人  
09 皆仰志。後聞衡嶽山有思大和尚。常持法花經。高  
10 名播世。遂往彼山。禮謁思大和尚。思大和尚於此經中菩提生。  
11 常持法花經。護身云云。其天台見已。和上云。識吾已否。  
12 童子生年未幾。想遠佇嘉名。故來相謁。和上云、且  
13 於法花道場中禮佛。天台入禮已。便得加備得宿命。知  
14 自省數十生。與思大和上於靈鷲山中。釋迦如來會  
15 下。同聽法花。却來相見。天台云。靈山一別。迄至于今。  
16 宿因善緣。得遇相見。若不久植善根。曷能如此。  
17 夫師僧父母。恩法俱深。以義校量。不无憂劣。始末  
18 倫超。有其六種。一處胎凡聖異。二誕生胎化異。三  
19 長養色法異。四攝受恩愛解脫異。五救拔世出  
20 世間異。六結緣一生多劫異。  
21 理致深遠者。實相至理深遠幽[囧]難名相也。言旨淵玄  
22 者。理既深遠。難名難示。意亦深遠。猶如何者。下文云  
23 一切海淵。若但依文才者。如傍佛云云。隨逗機緣者。教  
24 門不一。隨逗機緣。引門一軌遍絕。  
25 滿本願中說。四願三願已滿。唯有衆生未度了。從悲起應。  
26 度脫衆生。通明諸經者。通者統也。統通十二分教。生  
27 起之因有三。滿本願中間。菩薩發弘誓。誓度於衆生。衆生  
28 未度菩薩。先成佛者何耶。答。菩薩誓度衆生訖。然[經]  
29 常成佛。衆生未度盡。功行任運自立。然成佛也。  
30 經云。與梵王受記。汝當得菩提。梵王。我願菩薩爲汝不求  
31 菩提。故菩薩自然得。汝若求菩薩。菩薩漸漸遠我。雖滅度留  
32 諸教法。與作得度因緣。結僧那者。梵語漢言。弘誓  
33 也。引資聖弘誓。講經百遍。和上弘亦然。終大悲以赴  
34 難者。初發心時。發四弘願爲發斯願[修]。因得果功圓事  
35 畢劫來生死。救度衆生。即文殊菩薩也。文殊釋  
36 迦九代祖師。妙淨德八子。皆師妙光。竝得成佛。其長  
37 子攝是文殊菩薩。第二子攝第一子。展轉相攝。至第八子。  
38 第八子者。即釋迦也。將此第八釋迦。逆望文殊。即〈是〉第九祖  
39 攝也。處胎經中。文殊我已〈名〉成佛。曾爲釋迦師二尊。不

- 40 竝化。故我爲菩薩。  
 41 池中生月。嶺上觀廻。知身處紉。不染榮華。  
 42 得憐十聖。近佛無回。遍身百憶。應供娑婆。  
 43 隨念忽至。只是阿羅。

#### 四、見出し語の検討

録文のうち、釋文の見出し語となっている箇所として、以下の九つが挙げられよう。

- 01行：天台者
- 21行：理致深遠者
- 21行：言旨淵玄者
- 22行：猶如何者
- 23行：若但依文才者
- 23行：隨逗機緣者
- 26行：通明諸經者
- 32行：結僧那者
- 33行：終大悲以赴者

このうち、「天台」「理致深遠」、「言旨淵玄」、「若但依文才」、はいずれも智顛『維摩經玄疏』（以下『玄疏』と略す）卷一冒頭部分、「天台云、此經理致深遠、言旨淵玄。若但依文帖釋恐止事數而已。」に對應した見出し語であり、羽094Rと『玄疏』との深い関連性を物語るものである<sup>5</sup>。また、26行目の「通明諸經」も、『玄疏』卷一の「教相者既通明諸經同異、故義兼總別。」と見え、同じく對應している<sup>6</sup>。だが、上記以外の23行目の「隨逗機緣」、32行目の「結僧那」、33行目の「終大悲以赴」の三語は『玄疏』には見えない。この三語までを含むのが、實は道液の『淨名經關中釋抄』卷上なのである。

以下に對照表を示す。便宜上『淨名經關中釋抄』は大正藏本を利用したが、羽094Rと對應する卷上卷頭部分を殘す敦煌寫本には、大正藏の甲本となったP2580や乙本のS2584、丙本S2739などの他に、P2079、P2288などが知られる。

<sup>5</sup>T38、No1777『維摩經玄疏』519a。

<sup>6</sup>同注5、519b。

<p>道液『淨名經關中釋抄』卷上 (大正藏 85 册、No2778)</p>	<p>羽 094R</p>
<p>天台云。</p>	<p>天台是何人也。言天台者□山立稱。天台法師住在此山。莫敢取其名、故就山名其號也。法名智顛。俗姓陳氏。是荊州南陵郡華容人也。乃是地。前業生菩薩。造維摩經疏千紙。門前先立此五義。何以知是地前業生菩薩。年始七歲。因隨父母入寺。至法花道場。聞一僧誦法花經六卷。隨聞隨誦。意猶未足。餘一卷不聞諦自思惟而便悟也。及〈年〉十五。聲遍天下。教典竝通。人皆仰志。後聞衡嶽山有思大和尚。常持法花經。高名播世。遂往彼山。禮謁思大和尚。思大和尚於此經中菩提生。常持法花經。護身云云。其天台見已。和上云。識吾已否。童子生年未幾。想遠佇嘉名。故來相謁。和上云、且於法花道場中禮佛。天台入禮已。便得加備得宿命。知自省數十生。與思大和上於靈鷲山中。釋迦如來會下。同聽法花。却來相見。天台云。靈山一別。迄至于今。宿因善緣。得遇相見。若不久植善根。曷能如此。夫師僧父母。恩法俱深。以義按量。不无憂劣。始末倫超。有其六種。一處胎凡聖異。二誕生胎化異。三長養色法異。四攝受恩愛解脫異。五拔救世出世間異。六結緣一生多劫異。</p>
<p>「此經理致深遠。</p>	<p>理致深遠者。實相至理深遠幽隱難名相也。</p>
<p>言旨淵玄。</p>	<p>言旨淵玄者。理既深遠。難名難示。意亦深遠。</p>
<p></p>	<p>猶如何者。下文云、一切海淵。</p>
<p>若但依文帖釋。</p>	<p>若但依文才者。如傍佛云云。</p>
<p>恐指事數而已。一教宗極終自難量。猶須略付幽微顯不思議旨趣。今輒於文前撰五重玄義。第一釋名。第二出體。第三明宗。第四辯力。第五判教相。」 此名不思議人法是名。不思議真性解脫為體。不思議佛國因果為宗。不思議權實折伏為力用。不思議帶偏顯圓為教相。故今明此經。始從如是我聞終乎歡喜奉行。皆明不思議也。所以五義次第爾者。雖理絕名言。非言無以設教。故於無名之道假名相說而名以召法法以應名。是以經之指歸蘊在名內。故先標名。夫尋名得理。理即真性解脫。真性解脫即經之體也。故次出經體。體不孤致。求之有方涉行修因然後致果。故用因果為入理綱宗。行因得果即能巧用權實。析伏攝受利益衆生。故次明力用。</p>	

聖人設教。隨逗根緣。根緣不一。是以教有同異。故次明教相也。	隨逗機緣者。教門不一。隨逗機緣。引門一軌遍絕。滿本願中說。四願三願已滿。唯有衆生未度了。從悲起應。度脫衆生。
第一釋名門中復有三意。初辯教起所由。次明翻譯帝代。後正釋經題。初教起所由有通有別。	
通明諸經者有三意。一爲滿本願。故一切諸佛。行菩薩道。皆發四弘誓願。今爲答。初衆生無邊誓願度。故說教也。	通明諸經者。通者統也。統通十二分教。教生起之因有三。滿本願中。問菩薩發弘誓。誓度於衆生。衆生未度菩薩。先成佛者何耶。答。菩薩誓度衆生訖。然常成佛。衆生未度盡。功行任自運立。然成佛也。經云。與梵王受記。汝當得菩提梵王。我願菩薩爲汝不求菩提。故菩薩自然得。汝若求菩薩。菩薩漸漸遠我。雖滅度留諸教法。與作得度因緣。
故肇師云。結僧那於始心。	結僧那者。梵語漢言。弘誓也。引資聖弘誓。講經百遍。和上弘亦然。
終大悲以赴難。如下文云。菩薩取於淨國者皆爲饒益諸衆生故。	終大悲以赴難者。初發心時。發四弘願爲發斯願修。因得果功圓事畢劫來生死。救度衆生。即文殊菩薩也。文殊釋迦九代祖師。妙淨德八子。皆師妙光。竝得成佛。其長子攝是文殊菩薩。第二子攝第一子。展轉相攝。至第八子。第八子者。即釋迦也。將此第八釋迦。逆望文殊。即〈是〉第九祖攝也。處胎經中。文殊我已〈名〉成佛。曾爲釋迦師二尊。不竝化。故我爲菩薩。 (以下偈頌は略す)

一瞥して分かるのは、22・23行中の「猶如何者。下文云、一切海淵。」に對應する一文が見られないこと以外、文義の停滯が無いことである<sup>7</sup>。本寫本はゆえに『淨名經關中釋抄』卷上の冒頭に相當する釋文であると證明しえよう。

ちなみに、「終大悲以赴難者」の釋文中の文殊菩薩の故事は、『法華經』序品に見えるもので、文殊菩薩を釋迦の九代の祖師であると解するのは、智顛『法華文句』卷三上に「妙光是釋迦九世祖師」といい、また梁法雲『法華義記』卷二に「昔日日月燈明佛在俗有八子、此八子昔日是文殊弟子、文殊教化八子皆成佛道、八子之中最後成佛者名曰燃燈、燃燈佛即是定光、定光佛即是釋迦之師、釋迦復是彌勒之師、然則文殊即是釋迦祖師。」とあるように、法華經の注疏に見られる。

本寫本は、冒頭の「天台」の解説を除けば、引用も冗漫にならず簡略的かつ平明で、分かりやすさに重點が置かれたものと考えられる。釋文のあるべき姿と言えるだろう。

<sup>7</sup> 「猶如何者。下文云、一切海淵。」の下文とは『維摩經』菩薩行品中の文を指す。

## 五、智者大師別傳の異本

本寫本が『淨名經關中釋抄』卷上の釋文であるのと同時に重要なのは、上に述べた通り、「天台」の解説部分の内容にある。『敦煌祕笈・目錄冊』に「首部ハ、天台智者大師別傳異本」と記される通り、この智顛の傳の内容は、他書の持つそれと大幅に異なる。

天台宗の實質的な開祖である智顛の傳記は、いま、各種史書や『佛祖統紀』、『天台九祖傳』などの天台系の諸書に見られる。また、別傳については、現在に傳わる『隋智者大師別傳』は後代の名稱であって、もとは『行狀』とのみ呼ばれていたという。最も早く成立した智顛傳は、『國清百錄』に次のように記される。

九月十九日……勅云、師還寺不更開先師龕、必當大異。對云、爾勅旨云、弟子欲爲先師造碑。先師有若爲行狀。對云、先師從生以來、訖至無常、其間靈異非止一條、竝是弟子灌頂記錄爲**行狀**一卷、由在山内未敢啓。（『國清百錄』卷三「僧使對問答第八十六」）

つまり隋の大業九年（605）九月十九日には高弟灌頂が著した先師智顛の「行狀」一卷は、いまだ彼の墳墓内にあった。その後、煬帝の勅により墓が発かれると、墳墓内部にあったそれは書寫され各州に一部ずつ配布されたという。

使人盧政力還奏。開先師龕墳、不見舍利。又上**行狀**一卷。百司竝賀。…  
…今有**行狀**一卷、諸公等共觀之、諸州考使各寫一通、還所部流布。（『國清百錄』卷四「勅報百司上表賀口勅第九十一」）

この時の「行狀」の内容がどのようなものであったか、今全貌を知る術は無いが、ここから始まる智顛の傳記は『續高僧傳』などの史傳に受け繼がれていったと考えられる。だが、この「行狀」自體の行方を記したものは無かった。その後、大業九年から一世紀と半ばを過ぎた唐代宗の永泰元年（765）になって、顏眞卿らによりこの「行狀」が発見された。これは『天台靈應圖本傳集』卷二所收の顏眞卿「天台山國清寺智者大師傳」に見え、次のように記されている。

唐魯公顏眞卿、永泰貶吉州別駕、周遇法源大師、遂獲都灌頂法師所著**行狀**、竝天台國清百錄、輒攝其要、繼此傳云<sup>8</sup>。

ここで発見された「行狀」は、おそらく大業九年に各州に配布されたうちの一本であったと思われ、その機縁により顏眞卿は智者大師傳を著したのである。

<sup>8</sup>『傳教大師全集』卷三所收『天台靈應圖本傳集』卷二に收められる顏眞卿「天台山國清寺智者大師傳」の末尾。

この「行狀」が「別傳」と呼ばれるようになったのは、智顛没後、墓をあばき「行狀」が入手されて以後まもなくであったらしい。あるいは同時代的に併稱されていたかもしれない。なぜなら645年成立の『續高僧傳』卷十七智顛傳には、「…事見別傳。」と見えるからである。ただ、『續高僧傳』は度重なる増補修訂を經ているため、「行狀」が後に「別傳」と書き改められた可能性は考慮されなければならない。いずれにせよ、智顛没後まもなく智顛傳は廣く世に傳わり、「行狀」そして「別傳」と呼ばれ、『續高僧傳』の藍本の一つとなったと考えられる。

さて、副葬品であった灌頂著「行狀」以外にも、智顛傳は製作された。知られる限りの作者名を挙げれば、法琳・灌頂・法論・智果・道證、そして顏眞卿や梁肅、曇翬がいる。『續高僧傳』卷十七智顛傳には、次のようにいう。

……沙門灌頂侍奉多年、歷其景行可二十餘紙。又終南山龍田寺沙門法琳、夙預宗門、觀傳戒法、以德音遽遠、拱木俄森。爲之行傳廣流於世。

ここにはすでに灌頂と法琳の名しか記載されていないが、『國清百錄』ではさらに二名の名が見える。また、智顛傳製作の志を持ちながら未完成に終わった智寂の名も記されている。

先師以陳太建七年歲次乙未、初隱天台。……先師神光而生、結跏而滅。處證妙法、出作帝師。備是渚宮法論、會稽智果、國清灌頂等、三傳所載。又沙門智寂、編集先師遺迎信命、搜訪未周、而智寂身故、筆墨之功與氣俱棄。余覽其草本、續更撰次諸經方法等、合得一百條、呼爲國清百錄、貽示後昆、知盛德之在茲<sup>9</sup>。

智寂の未完成稿本は、「章安撰する所の別傳は國清の智寂禪師本を用い、稍や増益を加へ、遂に世に行わる」<sup>10</sup>と傳えられる如く、『國清百錄』とともに灌頂の別傳の草本となった。さらに、『傳教大師將來臺州錄』には、道證の撰になる「天台山智者大師別傳一卷、一十二紙」が見える。顏眞卿による『智者大師傳』に續くこの道證の傳は、いま『天台靈應圖本傳集』に所收され、名を「智者大師述讚序」という。『本傳集』にはさらに、曇翬『國清寺智者大師影堂記』も收められる。また『台州錄』は、梁肅の「天台山智者大師別傳論一卷、六紙」を傳えている。

このように、入唐した最澄により我が國へは唐代に作られた數々の智者大師傳が將來されたけれども、大陸においては、『續高僧傳』の撰者道宣による目錄『大唐内典錄』卷十（懿德元年、664）に「天台智者別傳」の書名が記されて以後、730

<sup>9</sup> 『國清百錄』卷一、灌頂序。

<sup>10</sup> 『佛祖統紀』卷九、玉泉寺法論の條。

年『開元釋教錄』、800年『貞元新定釋教目錄』等の一切經目錄には收められなかった。そのため開元録や空海の將來した貞元録に依據して作成された日本の古寫經類にも、この智者別傳は存在せず、ひとり天台に保存されたのである。

## 六、諸別傳との比較

隋から唐代を通じて編まれた智顛の別傳はかくの如き量を見、灌頂、顔眞卿と道證の書、『續高僧傳』所載の智顛傳とを現在に傳えている。これらの傳記を、羽094Rの「天台」を解説した釋文と對照させることにより、羽094R 當該部分の異質性を明らかにすることが可能となるであろう。

比較對照するにあたり、ひとまず讚と傳の形態をとる道證『智者大師述讚序』は除外した。それはこの述讚が問題の殘る箇所を含むからでもある<sup>11</sup>。

以下の表は、内容が重複していると認められる部分を太字で示したものである。

羽 094R	灌頂別傳	續高僧傳智顛傳	顔眞卿別傳
天台是何人也。言天台者□山立稱。天台法師住在此山。莫敢取其名、故就山名其號也。— ①			
法名智顛。俗姓陳氏。是荊州南陽郡華容人也。— ②	先師諱智顛。字德安。俗姓陳氏。潁川人也。……家隨南出。寓居江漢。因卜荊州之華容縣。	釋智顛。字德安。姓陳氏。潁川人也。有晉遷都。寓居荊州之華容焉。	大師諱智顛。字德安。俗姓陳氏。潁川人。其先隨晉先帝南遷。遂寓居荊州之華容縣。
乃是地。前業生菩薩。造維摩經疏千紙。門前先立此五義。何以知是地前業生菩薩。— ③			
年始七歲。因隨父母入寺。至法花道場。聞一僧誦法花經六卷。隨聞隨誦。意猶未足。餘一卷不聞諦自思惟而便悟也。— ④	年歲喜往伽藍。諸僧口授普門。初契一遍即得。而父母遏絕不聽。數往每存理。所誦。惆悵未聞掩。忽自然能通其餘文句。	七歲喜往伽藍。諸僧誦其情志。口授普門品。初契一遍即得。二親遏絕不許更誦。而情懷惆悵。奄忽自然通餘文句。	十歲法華經普門品。一遍便誦。

<sup>11</sup>『天台靈應圖本傳集』目次には「天台大師略傳」の書名があるものの、實際の文章が残らないと考えられていた。しかし池麗梅(2005)によれば、「述讚」と「略傳」本文の境界が曖昧になってしまった結果、「略傳」が存在しないと見なされるようになったとし、本來あったはずの「略傳」とは、道宣『大唐內典錄』の智顛傳だとする。ただ、その「略傳」も羽094Rとは全く重複が見られないため、本稿では「述讚」とともに除外した。

<p>及〈年〉十五。聲遍天下。教典竝通。人皆仰志。— ⑤</p>	<p>年十五。值者無之。</p>	<p>志學之年。(土梁承聖屬元帝淪沒。)</p>	<p>十五(值元帝敗。家國淪亡。)</p>
<p>後聞衡嶽山有思大和尚。常持法花經。高名播世。遂往彼山。禮謁思大和尚。思大和尚於此經中菩提生。常持法花經。護身云云。其天台見已。和上云。識吾已否。童子生年未幾。想遠佇嘉名。故來相謁。和上云。且於法花道場中禮佛。天台入禮已。便得加備得宿命。知自省數十生。與思大和上於靈鷲山中。釋迦如來會下。同聽法花。却來相見。天台云。靈山一別。迄至于今。宿因善緣。得遇相見。若不久植善根。曷能如此。— ⑥</p>	<p>昔在周室。預知佛法當禍。故背北遊南。意期衡嶽。以希棲道。權止光州大蘇山。先師遙・風德。如飢渴矣。其地乃是陳齊邊境。兵刃所衝。而能輕於生重於法。忽夕死貴朝聞。涉險而去。初獲頂拜思師。歎曰。昔共靈山同聽法華。宿緣所追。今復來矣。即示普賢道場。爲說四安樂行。……經二七日。誦至藥王品。諸佛同讚。是真精進。眞法供養。到此一句。身心豁然。寂而入定。持因靜發。照了法華。……自心所悟及從師受。四夜之進功踰百年。聞一知十。何能爲喻。觀慧無疑。禪門不擁。宿習開發。煥若華敷矣。思師歎云。非爾不感。非我莫識。所入定者。法華三昧前方便也。所發持者。初旋陀羅尼也。</p>	<p>又詣光州大蘇山慧思禪師。受業心觀。……思每歎曰。昔在靈山同聽法華。宿緣所追。今復來矣。即示普賢道場。爲說四安樂行。顛乃於此山行法華三昧。始經三夕。誦至藥王品。心緣苦行。至是真精進句。解悟便發。見共思師處靈鷲山七寶淨土聽佛說法。故思云。非爾弗感。非我莫識。此法華三昧前方便也。</p>	<p>聞慧思大師。在光州大蘇山。因往謁焉。大師歎曰。昔於靈鷲山。同聽法華經。宿緣所追。今復來矣。即示普賢道場。爲說四安樂行。乃如教修行。經二七日。誦至品諸佛同讚。是真精進。眞法供養。身心豁然而入定。持因靜。發得宿命通。照無照了。具以白。師曰。非爾不感。非我不識。所入定者。法華三昧前方便也。所發持者。初旋陀羅尼也。</p>
<p>夫師僧父母。恩法俱深。以義較量。不无憂劣。始末倫超。有其六種。一處胎凡聖異。二誕生胎化異。三長養色法異。四攝受恩愛解脫異。五救拔世出世間異。六結緣一生多劫異。— ⑦</p>			

灌頂別傳、續高僧傳の智顛傳、顏眞卿別傳の三書を竝列すると明らかになる

のは、續高僧傳の智顛傳が、灌頂の別傳を藍本として増補刪修を加えたものであり、さらに顔眞卿のそれは『續高僧傳』よりも一層簡略化されていることである。そして何よりも、この灌頂別傳系統と羽094Rの智顛傳相當の釋文とに、共通する内容が殆ど無いことが浮き彫りとなってくる點である。以下、表中に示した數字によってその異同を示そう。

① 天台大師の呼稱。

天台山に依った呼稱であることは明白だが、實はその次第を智顛の諸傳中には求めることは出来ない。羽094Rでは肝心の山名が判別不能である恨みを残す。待考。

② 智顛の本貫。

荊州華容縣と記す文獻は多いが、郡名を載せるものは無い。隋代には、華容縣は南郡に屬し、のち大業初年に復置された巴陵郡屬となった。しかし羽094Rでは「南陵郡」に作る。あるいは「陽」字か。待考。

③ 智顛と『維摩經』との關連。

維摩經疏（即ち淨名經疏）は智顛の最晩年に勅命により天台山にて編まれたと考えられるが、羽094Rでは、「この地」すなわち前出の荊州華容において維摩經疏千紙を造ったとする。荊州において維摩經疏を著したという記録は見えない<sup>12</sup>。また本部分は、灌頂別傳の系統には一切見えない内容である。

④ 幼少期に口授された『法華經』。

羽094Rのみが「法華經六卷」と作る。他書はみな『法華經』の一品である「普門品」と作る。

⑤ 十五歳時の名聲。

ここは羽094Rと灌頂別傳の二者のみ、十五歳時に、すでに名が世に知られていたとしている。

⑥ 前世、靈鷲山でともに經を聞いた南嶽慧思との邂逅。

羽094Rと他書の共通する部分は、前世での出會いを記した場面であるが、内容そのものは似通うものの、この出會いを両者が對話する形式で順を追って表記する仕方など、描き方が決定的に異なる。また、「思大和尚於此經中菩提生。常持法花經。護身云云」という慧思に對する簡略的説明的な描寫は、これが別傳ではなく注疏釋文であることを示すものといえる。

⑦ 智顛が「倫超」である理由六點。

生涯において、智顛が一般の道理を超えて他と異なる點が六つあったとする。

<sup>12</sup>『續高僧傳』卷十七智顛傳に、「所著法華疏止觀門修禪法等。各數十卷。又著淨名疏至佛道品。有三十七卷。皆出口成章。侍人抄略。而自不畜一字。」という。

それぞれ、一：胎児の頃より凡夫と聖者の違いがあった。二：胎中で種々の教化を現じるといふ点で異なつた。三：五感でとらえられるすべての感覚が他人と異なつていた。四：父母や師僧の恩愛を蒙りながら完全なる悟りを得たこと（が他人と異なる）。五：世間、出世間（ここは世俗を指すか）の苦しみから救い出した。六：一生多劫に渡り、衆生を佛法と縁づけたことが他人と異なつていた。これらの内容は、いずれの点も、智顛傳より案出されたに違ひないとはいへ、他書に一切見られない描寫であり、羽094Rの特殊性を示すものと言えよう。

かくのごとく、會話調の文體をもち、他書には一切見られない記述、内容構成を含む羽094Rの智顛傳は、相當に異色なものである。これは明らかに灌頂の別傳ではない、別の智顛傳に依つたものと考えるのが妥當であろうが、しかし何れの傳に依つたものか。或いは、「廣く世に行わる」と記される法琳のものなのであろうか。灌頂別傳の系統しか残らない今となつては、それを知る術は残されていない。この點の解明には、新出資料の發見や今後の研究に期待するほか無いであらう。

ただ一つ注意すべきは、本寫本は道液の『淨名經關中釋抄』の釋文であり、同じく道液の著した『淨名經集解關中疏』が上元元年（761）の序を持つことから考えて、『釋抄』もそれと大差ない時期の成立と考えられることである。とすれば、顏眞卿による別傳（765年）の制作と『釋抄』の成立とはほぼ同時期と言つてよい。よつて本釋文の書寫年代は少なくともそれ以降になるわけだが、しかし顏眞卿の別傳を参照した形跡は、上記に見た通り皆無である。したがつて、本寫本は、天台系に保存された灌頂系統の智顛傳とは別の、つまり、灌頂の行狀（別傳）が佚してから顏眞卿による發見を経て、彼の手により傳が新たに作られるまでの一世紀半の間に、唐代に流傳してゐた智顛傳の一端を示したものと考え得るのではないだらうか。

## 七、終わりに

灌頂が著した別傳は、例えば志磐に「尚ほ浮辭多し」との非難を受けるごとく、内容面においても、文體においても、俗であつたとされる<sup>13</sup>。享保年間、叡山の可透による『天台大師別傳句讀』叙には次のようにいう。

初大師滅後、隋帝遣柳顧言、訪一代行狀於門人。於是章安尊者親製此狀、以上。帝勅諸州考使、令各寫一通流布。然其文緝裁巧密、排鋪菁

<sup>13</sup> 『佛祖統紀』卷六、四祖天台智者法空寶覺靈慧大禪師傳注に、次のように記される。「…至若別傳敘事之際、尚多浮辭、今竝刪略、務存簡實。至他所未錄者、今竝收載。覽者宜知。」

麗。不似尊者平昔之筆。蓋當時徐庾文章盛行于世、朝野翕然、競相模範。意者、菩薩權智、難誘引後進、不得不循俗尚、而投時機也<sup>14</sup>。

つまり、別傳が灌頂の平生の文と異なるのは、先師智顛の教えと行いを世に知らしめるため、「大權漚和之一端」として、要は方便の一端として、當時一世を風靡した徐庾體に倣った俗體で書かれたからである、と解釋するのである。こういった理解は、他にも天台座主を三度務めた堯恕親王の『智者大師別傳新解』、また喜多院第35世忍鎧『天台智者大師別傳考證』の跋にも、それぞれ似たような文言が見える<sup>15</sup>。

灌頂の筆になる別傳が俗體であるからといって、智顛の弟子達により同時期に作られた別傳まで同様に俗體で書かれたとは限らないけれども、いずれの別傳も今に伝わらないため、それを知る術はもはや残されていない。我々はただ前章での比較を通じて、灌頂系統とは別の聖賢傳説を伝えるらしい羽094Rの文章も、また同じく俗體で記されていることを知るのみである。

小論では、「(擬)天台智者大師智顛別傳」と題された羽094Rについて、これが別傳ではなく、道液『淨名經關中釋抄』の釋文であることを示した。その上で、釋文に引用された「天台」の解説、すなわち智顛の傳記に相當する部分が、現在に傳わる數種類の智顛傳とは全く異なる系統に屬することを明らかにした。本寫本はこの二つの意味において、誠に貴重な資料であることは言うまでもない。ただ先行研究の更なる確認など、なお遺漏があるかと思われる。各方面からのご示教をお願いしたい。

## 使用圖録

『敦煌祕笈』影片冊一、杏雨書屋、2009年

『敦煌祕笈』目錄冊、杏雨書屋、2009年

## 参考文献

岩本篤志 2011 「敦煌占怪書「百怪圖」考——杏雨書屋敦煌祕笈本とフランス国立圖書館藏本の關係を中心に」『敦煌寫本研究年報』第五號、65-80頁。

落合俊典 2004 「敦煌祕笈目錄(第433號至第670號)略考」『敦煌吐魯番研究』第7卷、174-178頁。

高田時雄 2004 「明治四十三年(1910)京都文科大學清國派遣員北京訪書始末」『敦煌吐魯番研究』第7卷、13-27頁。

<sup>14</sup>『續天台宗全書』史傳一「智者大師傳註釋類」を参照。

<sup>15</sup>同注14。

方廣鋤・許培鈴 1994 「敦煌遺書中の『維摩詰所說經』及其注疏」『敦煌研究』1994年第4期、145-151頁。

曾曉紅 2007 「敦煌本『維摩經』注疏研究概述」『2007 敦煌學國際聯絡委員會通訊』上海古籍出版社、2007年9月、70-97頁。

池麗梅 2005 「『天台靈應圖本傳集』に關する一考察」『中華佛學研究』第9期(民國94年)、臺北：中華佛學研究所、183-202頁。

山内舜雄 1953 「天台智者大師別傳竝に註釋について」『駒澤大學學報』復刊通號2、1953、54-62頁。

—— 1956 「天台智者大師別傳竝に註釋の研究」『印度學佛教學研究』通號7、1956、132-133頁。

—— 1961 「天台智者大師別傳竝に註釋について(承前)」『駒澤大學佛教學部研究紀要』通號19、1961、63-77頁。

山口弘江 2003 「天台維摩經疏の流傳に關する諸問題」『印度學佛教學研究』51(2)、2003、640-642頁。

※智顛傳の資料には、主に『續高僧傳』、『國清百錄』、『傳教大師全集』卷四、『佛祖統記』、『續天台宗全書』史傳一「天台大師傳註釋類」を利用した。

(作者は京都大學文學部非常勤講師)